

[書 評]

John Skalko

Disordered Actions: A Moral Analysis of Lying and Homosexual Activity

Neunkirchen-Seelscheid: editiones scholasticae, 2019, pp. 371,
ISBN: 978-3-86838-218-1, 149.9 × 20.3 × 210.8mm, € 39.90

石 田 隆 太

本書は、トマス・アクィナスの哲学および倫理学に依拠しながら、嘘言と同性愛行為を同時に論じることによって、同性愛行為に対して一定の道徳的評価を下すものである。本書は結論として、嘘言も同性愛行為も道徳的に悪だという考えを支持する。結論部で「ゲイたちは善良だが、同性愛行為は嘘言と同様に道徳的に悪である」(321)とまで言う著者に対して、率直に言って評者は違和感を覚えた。それがこの書評の執筆動機である。内容の紹介をしつつ適宜論評を加えることにしたい。

導入部で著者は始めに、嘘言を正当化しうる道徳理論として帰結主義を取りあげながらも、最終的には帰結主義を棄却する。それは善に関して帰結主義とは異なる理解を支持することによってであり、彼は自然本性的な善という善理解を支持する (Cf. フィリッパ・フット)。帰結主義を棄却することで彼は、嘘言を道徳的に許容する有力な立場が存在しないことを含意させている。

続けて彼は、トマスを本格的に参照し始めて、嘘言と同性愛行為に関する基本的な考え方を提示する。まず、嘘言と同性愛行為を「事情に関わりなく常に悪である行為」、すなわち「それ自体で悪い行為」と見なす (ST, II-II.110.3, ad 4; 154.12, ad 1)。そのうえで、嘘言と同性愛行為が類似した理由によって悪であることを興味深いこととしている。その類似は、行為の悪性が同じ程度であることに求められるのではなく、行為の悪性を論証する推論に求められる。嘘言が悪である理由は、それが発話の目的を逸脱するからである (ST, II-II.110.3; *InSent.*, III.38.1.3; *Quodl.*, VIII.6.4)。それに対して同性愛行為が悪である理由は、それが生殖能力の目的に反するからである (SCG, III.122; *De malo*, 15.1)。要するに自然本性的な目的論が主要な根拠である。さらに著者は、トマスの議論に依拠する

理由も述べている。第一の理由は、トマスが同性愛行為に反対する哲学的で強固な議論を提出した最初の哲学者だということである。第二の理由は、トマスの説明が今日のわれわれに語りかけるものでもあるということである。著者がそう考えるのは、同性愛に関する問題においてトマスの議論が現代でも議論の俎上に載せられることが多いからである。

導入部の最後で著者は、嘘言と同性愛行為に関するトマスの立場に対しては一般的に三通りの反応があることを指摘する。すなわち、(1) トマスの結論に同意しない人々、(2) トマスの前提に同意しない人々、(3) トマスの結論に同意しながらより適切な説明を提供する人々のことである。(2) の人々に関する説明の中で著者は、トマスの議論において前提されていることごとを次のように大まかに示している。1) 人間の自然本性的な機能を逸脱することは常に悪である。2) 発話の機能は人の心にあることを伝えるためにあり、生殖器の機能は子孫の生成と養育のためにある。3) それゆえ、嘘をつくことのために発話を使うことで発話の自然本性的な機能を逸脱すること、あるいは生殖にかかわらない目的のために生殖器を使うことで生殖器の自然本性的な機能を逸脱することは常に悪である(20)。ここで(2) の人々が批判する論点はやはり、或るものの自然本性的な機能を逸脱することは常に悪だというトマスの規範的目的論である。以上で見た導入部は既に著者の主張を簡略に示している。

第1章「われわれの先行者たちおよび同性愛行為を認める諸議論の検証」で著者は、同性愛行為について歴史上の哲学者たちがどう考えてきたのかを紹介するとともに、同性愛行為が道徳的に善であることを主張する最近の議論も紹介してそれを批判する。まず歴史上の哲学者たちは、そのほとんどが同性愛行為を道徳的に悪だと考えている。同性愛行為を許容する例外としてはポリュステネスのピオン、サド、ベンサムが挙げられ、サルトル以降はそれほど例外的ではなくなる。具体的にはボーヴォワール、エイヤー、フーコー、ローティエ、ネーゲル、シンガーの名前が挙げられている。ただしアドルノ、ゲルナー、ギーチ、アンスコムらは同性愛行為について否定的だった。サルトルが大きな画期を作った理由を著者は、サルトルが自然本性を否定したことに求めている。なお、アダム・スミスは中立的であった。

次に著者は、同性愛行為が道徳的に善であることを主張する最近の議論をその根拠によって六通りに分類する。その根拠とは、(a) 道徳的な経験、(b) 愛、(c) 善い帰結、(d) 同意そして危害の欠如、(e) 正義、(f) 自然法である。著者はこれらについて個別に批判し、いずれをも斥ける。(f) を根拠にする議論では、人間の繁栄に貢献するものは何であれ自然法と合致しているという第一の前提と、同性愛行為は(時に)人間の繁栄に貢献するという第二の前提が置かれている。著者はこの第二の前提を斥ける手段の一つとして、同性愛者の方がそうでない

人々よりもより高い割合で精神的な不調を来し自殺してしまうことを示すと彼が判断する種々の統計をも参照する。彼は、これらの統計がしばしばオランダやニュージーランドのような同性愛に関して先進的な国で見られることから、同性愛者により多く見られる不調の主な原因が社会的要因ではなくて同性愛そのものの側にあると分析する。統計資料のこうした取り扱いについて、評者はただ疑問を抱かざるをえない。また彼は、同性愛行為を擁護する見解として取りあげるべき最後のものとして、同性愛的な指向を持って「そのように生まれた」のだから同性愛行為をすることに道徳的な責任は問えないことを主張する見解を紹介して批判する。さらに彼は、歴史上の哲学者たちの多くが同性愛行為を認めないことに対して積極的であるが、奴隷制や女性抑圧についてはむしろ否定的であることを強調する。こうして彼は、同性愛行為を肯定する議論には有力なものが皆無であり、また歴史上の哲学者たちのほとんどが同性愛行為を道徳的に悪だと考えてきたのだから、同性愛行為が悪であることの蓋然性を高く見積もる。同性愛行為に関する哲学的なサーヴェイは資料的に一定の価値があるだけに、こうした判断の材料にのみされていることは惜しい。

第2章「嘘とは何か」で著者は、嘘のさまざまな定義を提示する。まず嘘の道徳的な定義として最も有名なものは、その由来からグロティウスの定義とも呼ばれているものである。すなわち、「真実を知る権利を持つ者を誤りへと導くために、真実に反して語ったり行為したりすること」(100)という定義である。他にもいくつか嘘の道徳的な定義が挙げられたうえで、これらはすべて棄却される。次に取り上げられるのが嘘の非道徳的な定義であり、トマスによる定義が提示される。ST, II-II.110.3では「或る者がその心のうちにないことを言葉で表示すること」(創文社版第20冊, 157頁)だと言われているが、確言(assertion)という言葉を使って著者は「自分が偽だと思っていることを確言すること」(118)と定式化する。確言とは「何かをそれがあたかも真であるかのように或る者に提示すること」(同)である。彼は嘘の非道徳的な定義を他にもいくつか提示するものの、さまざまな問題点を指摘することでトマスの定義を正しいとする。第2章の結論部では、嘘言とは「自分が真だと思っていないことを確言すること」(140)とも言い、確言の説明も念入りに行う。

第3章「なぜ嘘言は悪いのか」で彼ははいよいよ、嘘言がなぜ道徳的に悪かという問題を正面から論じる。トマスがこの問題を論じる四つの基本テキストは、*InSent.*, III.38.1, *Quodl.*, VIII.6.4, *InEthic.*, IV.15, *ST*, II-II.109-13である。著者は、トマスの議論を再解釈する新自然法学派の解釈を取りあげて批判しながら、発話の目的や規範的目的論全般に関する反論への応答を通じて、トマスの議論を次のように形式化する。要となるのは「秩序づけられていないこと」(*inordinatio*)である。1) 自らのしかるべき目的に秩序づけられていない行為はいずれも秩序

に反した行為 (disordered action) である。2) 自然本性的な目的はしかるべき目的である (或る行為のいかなる自然本性的な目的もそのしかるべき目的である)。3) それゆえ、自らの自然本性的な目的に秩序づけられていない行為はいずれも秩序に反した行為である (1と2から)。4) 確言することの自然本性的な目的は真実を言うことである。5) それゆえ、(嘘言における場合のように) 真実を言うことに秩序づけられずに確言を用いることはいずれも秩序に反した行為である (3と4から)。6) 人間の善を含みもつ人間的な行為で秩序に反したものは道徳的に秩序に反している。7) 確言することは (真実がもつ) 人間の善に対する秩序を含みもつ。8) それゆえ、(真実がもつ) 人間の善に秩序づけられていない確言を用いることはいずれも (あらゆる嘘においてそうであるように) 道徳的に秩序に反している (5と6と7から) (179-80)。

第4章「なぜ同性愛行為は悪いのか」は本書の中核部分である。この問題の基本テキストは、*SCG*, III.122と *De malo*, 15.1である。より円熟した時期に属する *De malo* の議論が、嘘に関する部分で得た成果を生かして次のように形式化される。1) 自らのしかるべき目的に秩序づけられていない行為はいずれも秩序に反した行為である。2) 自然本性的な目的はしかるべき目的である (行為の自然本性的な目的はそのしかるべき目的である)。3) それゆえ、自らの自然本性的な目的に秩序づけられていない行為はいずれも秩序に反した行為である (1と2から)。4) 生殖器官を用いる自然本性的な目的は子孫の生成と養育である。5) それゆえ、(同性愛行為における場合のように) 子孫の生成と養育に秩序づけられずに生殖器官を用いることはいずれも秩序に反した行為である (3と4から)。6) 人間の善を含みもつ人間的な行為で秩序に反したものは道徳的に秩序に反している。7) 生殖器官を用いることは (新しい人間の命がもつ) 人間の善に対する秩序を含みもつ。8) それゆえ、(新しい人間の命がもつ) 人間の善に秩序づけられずに生殖器官を用いることはいずれも (同性愛行為においてそうであるように) 道徳的に秩序に反している (5と6と7から) (205)。

2) について著者は、さまざまな反論に応答するなかで、身体器官が諸能力の道具であることを強調する。どのような能力が道具を用いているかが道具の自然本性的な目的を決定する。著者によれば、ペニスが射精するために用いられる時には生殖能力が関わっているのであり、すなわち生殖という自然本性的な目的に関わっている。しかしペニスが排尿するために用いられる時には栄養摂取能力が関わっており、すなわち身体の健康という自然本性的な目的に関わっている。この点について評者は、生殖器的な使用および目的が生殖に尽きるとする考えにやはり違和感を覚えてしまう。

4) については、まずこの文脈では生成と養育が並置されているが、生成が先になれば養育もできないことは言うまでもないので、実質的には子孫の生成が

何よりも優先的に捉えられている。そのうえで著者は、性行為に他の目的を見出す論者たちに対して、生殖器が生殖という目的のためにあることそのものは誰も否定していないことを重視する。ただし、生殖器に自然本性的な目的があることそのものはやはり既に前提されてしまっている。

1) から 8) の議論は、子に恵まれない夫婦を擁護する議論においてさらなる改良を施される（なお、この部分で著者は唯一オーリーヴァの研究に言及する。この点については後述の通り）。著者は、トマスの含意として、異性からなる夫婦の行為は生殖という目的に対して自体的に (*per se*) 秩序づけられているが、それが附带的に (*per accidens*) 妨げられることを認める。これにより、秩序づけられていないということは、厳密には「それ自体で（現実的に）秩序づけられていない」（248）ことだと限定をつけて 1) から 8) を改良している。

第 5 章「でも常に悪いのか」はこれまでの主張を補強する部分である。ここで著者は、嘘言と同性愛行為が常に（すなわち例外なく）道徳的に悪であることを論じる。その理由はやはりそれらが自然本性的な目的に反しているからだが、著者はさらにそれが、自然本性を決定した神に反することも強調する。この章の後半部分は、それらが常に道徳的に悪であるという結論に対するさまざまな反論とそれに対する応答部分である。反論は八通りの根拠に即して区別される。すなわち、(1) 直観主義、(2) 帰結主義、(3) 共通善、(4) 暴力とのアナロジー、(5) 全体性の原理、(6) その結論は不可能な基準だということ、(7) 道徳的な過失、(8) 食べることとのアナロジーである。(4) で死刑、正戦、自己防衛における殺人が許容されるというトマスの主張との整合性が問われる点は特に興味深い。しかしどんな場合であろうと、嘘言と同性愛行為が道徳的に悪であるという点について著者の譲歩はほとんどないように思われる。

本書の結論はもはや繰り返すまでもないだろう。トーマス・M・オズボーン・ジュニア（聖トマス大学、ヒューストン、テキサス）はウェブ上で、本書がトマスの同性愛論を一冊の本で擁護したものとしては類例のないものであることを評価している (<https://thomistica.net/posts/2019/7/24/new-book-on-lying-and-homosexual-activity> 2020 年 9 月 2 日閲覧)。評者としても、トマスの同性愛論という極めてデリケートな話題に関して、嘘という別の興味深い話題と連関させて論じながら、トマスの議論を可能な限り整合的な推論形式で示すことにより、その点で読者に開かれた書物であることは評価したい。本書の成果に則って、著者が嘘についていないことは確かなのだろう。だからこそ、本書の登場によってより多くの討論がなされるのが理想である。

トマスの同性愛論は 2015 年に大きな注目を集めた。トマスの校訂版全集の編纂を行うレオ委員会のメンバーであるアドリアーノ・オーリーヴァ (Adriano Oliva) が愛を主題とする本を出版し、同性愛を擁護するトマス解釈を提出した

からである。その本はフランス語版 (*Amours: l'Église, les divorcés remariés, les couples homosexuels*, Cerf) とイタリア語版 (*L'amicizia più grande: Un contributo teologico alle questioni sui divorziati risposati e sulle coppie omolesuali*, Nerbini) でほぼ同時に出版された。大きな反響を巻き起こしたオリーヴァの解釈に対して著者は明示的に言及しないものの、彼とは正反対の立場であることは間違いない。上述のわずかな言及を除いて、オリーヴァの解釈に対する自らの態度を明確にしなかったことが惜まれる。トマスが同性愛行為に対して否定的なことを言っていることは覆せないだろうが、評者としては、今世紀においてもただそのことを繰り返し述べることしかできないのかどうかを考え続けたい。